

芭蕉の句碑と那珂地域の俳人たち

那珂市歴史民俗資料館



(芭蕉の句碑)

芭蕉の句碑は、寛政5年(1793)に建立されたもので、常陸那珂港・山方線通りの額田東郷有ケ池(現在は田圃^{ほとり})の畔にあります。句は、「松風の落葉か水の音涼し」と読めます。これまで伝承されているように、碑の建立が額田の俳人中嶋^{ごほう}五峰の力によるものであれば、五峰が75歳の時となります。五峰は額田の中嶋家の生まれで名は佐源次、通称は額田三日坊、五峰は俳号です。中嶋家には今でも「芭蕉翁」の位牌が残っています。

この五峰は、明和3年(1766)48歳の時に全国遊歴の旅に出ました。その途中で、木曾義仲と芭蕉の墓のある義仲寺(滋賀県大津市栗津)に立ち寄ります。その日がちょうど芭蕉の七二回忌日(時雨忌^{しぐれき})であることから、五峰自ら「時雨会」を主催して「芭蕉忌やかれ残りたる硯水」の句を揚げています。五峰の仲間は逍遙庵連中^{しょうようあん}と称され、妻の素嵐^{そらん}も俳句をよく詠んでいます。

最近、額田北郷の毘遮那寺境内から素嵐の句「朝顔や散るところより咲きいそぎ」が刻まれた句碑が発見されています。ちなみに、日立市中里の「玉簾の瀧」で知られる玉簾寺境内にも、文字には違いはありますが同じ句「松風のおち葉か水の音すすし」と刻まれた芭蕉句碑が建っています。

明治2年(1869)に刊行された『俳諧常陸千題』には、那珂地域の俳人として菅谷村の梅風、梨川、米崎村の昇月、鹿島村の観月をはじめ30余名が載っています。この他、江戸時代後半には飯田村大和田家の打出軒三巴や鴻巣村の静山、瓜連村の露玉らが出ています。

これらの俳人たちは、神社・仏閣の縁日句会を催したり、自らが催主となって句会・宗匠達の追善供養の句会を行っていました。芭蕉は貞享4年(1687)に鹿島神宮を参詣しており、その影響もあって、水戸藩内でも芭蕉を追慕する建碑が行われたのです。地方での俳聖芭蕉への尊敬と俳句仲間たちの意気込みが感じられます。



(素嵐の句碑)